

説明的文章における知識と教材の類型

—— 中学校二年生教材を中心に ——

一 はじめに

説明的文章を読むことの目的は、「知識」を得ることにあるとされる。しかし、説明的文章の読みの学習指導の目的は、文章の内容としての知識を身につけさせることには置かれていない。むしろそのことを否定すること、説明的文章指導の目標は明確になつてきたとも言える。近年の読むことの学習指導研究の関心は、文章理解過程において、読み手がどのように既有知識を用いて情報処理を行い、自らの知識を容させるかということにあった。読み手の側の知識を対象とした研究である。では、筆者や文章の側の知識はどのようにとらえればよいのか。本稿では改めてこのことを問題とする。

二 説明的文章の学習指導論における知識

これまでの説明的文章の学習指導研究において、知識に対してどのようなアプローチがとられてきたかをとらえ直してみたい。

一つ目の方向は、説明的文章に表現された筆者の認識 || 知識としてとらえるものである。筆者がどのように世界を認識し、知識に到達しているかを問題とする。文章表現として表された、あるいは文章内容に埋め込まれている、筆者が認識を得るために用いた方法を取り出し、読み手である学習者にも自分の世界認識の方法として身につけさせようとする学習指導論も展開された。一方で、文章において説明される知識が筆者という主体によって認識されたものに他ならないという考え方は、文章を批

間瀬 茂 夫

判的に読むという方向へも進む。こうした批判読みは、早くから、また繰り返し提唱されてきた。

二つ目は、知識⇨情報としてとらえる方向である。例えば、情報読みと呼び慣わされる学習活動は、図書館等で情報を集め、調べ、まとめるといった展開をとる。また、これとは別に、読み手が、文章の中の言語的な情報を処理し、知識の中に取り込む認知的過程に注目した学習指導が構想されてきたことは、はじめに述べた通りである。そこでの情報処理は、必要なものを選択するばかりではなく、連接関係をもって整合的に構造化された情報を構造に沿って理解することで、より正當に情報が理解できると考えられている。

三つ目は、文章において説明の対象となる知識と読者の持つ知識とがどのように結びつけられているかというレトリックをとらえようとする方向である。筆者は、説明の対象となる専門的な知識について、読者が共通して持つと想定される常識と結びつけ、読者の理解と納得を形成しながら説明する。そうした営みに対して、時には効果的なものとして、時には適切ではないものとして評価しながら読む読み方が教授の対象となる。

このような説明的文章における知識のとらえ方の方向性は、全体として見れば、知識に関して取るべきいくつかの立場をおおむね反映してきたと言える。しかし、問題も見出される。

まず、第一の観点における筆者の認識はどういうとき

に知識と言えるのか、あるいは言えないのかという問題がある。学習指導要領に倣った「事実と意見」に分ける読み方において、文章表現の「事実」と見なされる部分には、個別の経験から科学的な法則など様々なことが相当するが、それらは全て同じように知識と言えるのか。また、「意見」とされる部分は知識と見なすことはできないのだろうか。「意見」と知識とはどのような関係にあるのか。

第二の方向の情報というとらえ方に関しても同様のことが言える。情報イコール知識と見なすならば、文章にある情報は全て知識ということになるが、一般的にそのようにはとらえられない。例えば、調べ学習で用いる情報は、図書館といった機関で選定された図書にある情報という条件のもとで信頼性がある程度保証されている。学習活動の過程で数冊の本の情報を比較しより妥当な情報を選ぶことで知識たりえている。情報はどのようなときに知識になるのか。あるいは、文章理解を情報処理過程ととらえる考え方においては、文章構造に沿って文章を理解することがなぜ重要なのか。要点を要領よくとらえる理解だけでは何が欠けているのか。

このような問題は、批判読みという考え方がある程度解決してくれる部分もある。では、そうした読み方において知識はどのようなときに妥当ととらえられるのだろうか。ともすれば、文章の中の主張と現実とのズレばかりを問題にしたり、日常的な知識による説明と論証と

の区別がつかなくなつてしまつたりというように、批判読みにおいて、様々な混乱が生じる。それらは知識のとらえ方に起因しているのではないか。

三 知識の正当化と社会性

1 知識の種類

こうした疑問や問題の指摘は、全て私自身のこれまでの研究や主張にも向けられるものである。そして、これらの疑問に十分に答えるためのすべを現時点で得ているわけではない。しかし、一つ手がかりにしたいことがある。文章において、妥当な知識がどのように得られるか、知識の正当化がどのように行われているかということに關する議論である。

説明的文章教材は何らかの専門的知識を説明しているが、それは、科学的知識を対象としたものばかりではない。特に、中学校二年生以降の教科書教材では、内容やテーマが多様化、複合化している。このような知識の違いは、どのようにとらえられるか。自然科学的教材・社会科学的教材といった学問的分野による分類³⁾や、説明文・論説文・評論文といったジャンル分けとは異なる、説明的文章の知識の把握はできないものか。ここでは、知識の哲学をガイドとして、考察を進めたい。

ところで、アリストテレスは、「知」を次の三つに分類している⁴⁾。

理論知：学問知。他の仕方ではありえないもの。必然的な事柄、永遠の事柄に關する知。

実践知：思慮。「他の仕方でありうるもの」のうち、行われるもの。

制作知：技術。「他の仕方でありうるもの」のうち、作られるもの。

理論知とは、科学的知識が相当する。近代では、自然科学だけでなく、人間諸科学も体系化され、理論知化されている。実践知とは、何らかの具体的状況において「何をなすべきか」についての知である。政治が典型とされる。制作知については、アリストテレスは文学に關する「詩学」を挙げているが、例えば建築学は、技術に關する知が体系化され理論知となつたものと言える。

古代ギリシャにおけるこのような知の分類は、近代における学問領域に対しても適用されることがあるが、実践知や制作知の学問化は、様々な分野で行われていて、その境界を明示化することは難しい。また、知識哲学においては、理論知を中心に議論が進められてきていて、実践知および制作知を知識とみなすことができるかという問題がある。ただ、いずれも「知」であり、単なる個人の信念とは区別されるものである。

説明的文章においては、筆者の専門領域の知識の説明にとどまつているものと、そこから実践知や制作知へと展開するものがある。その際、実践知や制作知が論証の手順を経ずに付加的に述べられているものと、理論知

を根拠として論証的に述べられているものとがある。前者については、信念の域を出ていないように思われるが、では、単なる信念と知との区別はどのようなところにあるのか。

2 知識の正当化

単なる信念と知識の区別について、「知識とは正当化された真なる信念である」という古典的な定義を提示したのはプラトンである。⁶ その定義は長く知識に関する哲学において保持されてきたが、現代において、知識をこうした定義においてとらえる局面はごく限られている。だが、説明的文章から知識を獲得することを考える上では、なお重要な点があるように思われる。

蔵田伸雄は、「信念」と「知」「知識」との違いについて、プラトンの定義を引きながら次のように説明する。⁶

そして哲学的な知識論・認識論では、「知」とは「正当化された信念」(justified belief)、つまり何らかの証拠などによって「正しい」とされた信念を意味している。「信念」(belief)は「知っていること」を意味することもあるが、十分な根拠がなく、まだ正当化されていないものであり、その一方、「知」は科学的な知であれ、日常的な意味での「知識」であれ、それを正しいとするに十分な根拠を伴うと考えられている。科学とは、何らかの

実験や観察によって正当化されたか、あるいは正化可能・確証可能な命題の体系であり、共有可能な「知」である。また日常的な「知」についても、それが正しい「知」であるからには、何らかの証拠や証言を伴い、他者がその妥当性を確認できると考えられている。

ここで蔵田は、日常的な知識に広げて、「正当化」ということの重要性を指摘している。この指摘にしたがえば、説明的文章とは、正当化を行いながら知識を伝達する文章と特徴づけることができよう。そして、いわゆる文章の論理は知識の正当化の過程であり、それを理解することは、文章の中にある情報を知識として受け取るために必要な行為となる。では、知識の正当化は、どのようにしてなされるものなのか。

知識の哲学においては、一般に、正当化は推論によってもたらされると考えられている。⁷ 推論とは、前提から結論を導き出すことであり、妥当な前提から妥当な推論を行えば妥当な結論が引き出される。したがって、こうした妥当な推論によって生み出された知識が正当化された知識ということになる。

推論には、いくつかの種類があるが、最も確実な推論は演繹的推論である。前提が全て真なら、そこから引き出される結論も必ず真になるといえる推論である。しかし、演繹的推論では、導かれる知識が前提となる知識の中に含まれることになり、知識を拡張するという点では十分

な力を持たない。そこで、知識を生産する際には、帰納的推論や仮説的推論（アブダクション）、類推（アナロジー）などの推論が用いられる。これらの推論は、誤りを含む可能性が常にあるが、近代科学は、こうした推論を用いて新たな知識を発見しながら、確証のための手続的方法（代表的なものに仮説演繹法がある）を発展させることで、確かな知識を手に入れた。

知識における正当化の役割に注目すると、説明的文章における「論理」の役割がより明確になるように思われる。文章において述べられる様々な知識を知識たらしめているのが正当化の過程であり、それが「論理」ととらえられる。だから、説明的文章の「論理」には論証（推論）の形式を備えていることが望ましいが、実際には、全ての知識に論証が行われているわけではない。その場合、信念が述べられているにすぎないと受け取られこともあるが、知識の正当化は別の方法でも行われている。それはどのような方法においてか。

3 知識の社会性

科学的知識について、妥当な推論だけで正当化が成立しているとはみなさない立場がある。知識の正当化の過程を個人的な過程ととらえるのではなく、社会的に構成されるものだとする立場である。知識の社会性は様々なところに見出される。

その一つは、「認識論的依存」である。例えば高度

化した科学的知識に関しては、個人が一つ一つその正当性を確かめるわけにはいかず、他者からの伝聞で知識を獲得せざるを得ない。このことは、非科学者と科学者との間においてばかりでなく、科学者同士の間においても当てはまる。さらには、その相手がなぜ信頼できるのかということも確かに知ることができないとなれば、真理に到達したと言えないことになってしまう。このため、社会には、例えば学会や出版といった、認識論的依存の関係を信頼性のあるものとして保証することで知識の正当化に至る仕組みがある。

しかし一方で、そうした社会の仕組みが知の権力関係を生み出していて、人々はそうした関係に依存して生きているとも考えられる。こうした考えを極端に進めていくと、真理には永遠に到達し得ないという懐疑主義に支配されかねないが、私たちはそうはならず知識を発展させてきている。私たちが求めているのは真なる信念ではなく、「もっともらしさ」であり、いかに世界を認識するかという道具としての認識であるとするラディカルな知識論¹⁰も存在する。

4 説明的文章における専門的知識と常識

説明的文章における知識をとらえるうえで、もう一つ考えておきたいのは、文章中に登場する専門的知識と一般的な知識との関係である。浅野樞英は、古代ギリシヤのレトリックについて論じる中で、レトリックによる

説得で用いられる知識について、次のように述べる¹¹⁾。

アリストテレスは、『トピカ』で、大衆（多くの人々）を相手に話し合うには、「エンドクサ」（通念）に基づいて言論を展開することが有効だとしています。大衆を相手にした場合、大衆の「ドクサ」（見解・思いなし）を枚挙して、ほかの人たちの意見ではなく、かれら自身の意見に基づいて論ぜよ、ということです。

アリストテレスは、『弁論術』でも、同じようなことを言っています。ある人たち（つまり大衆）に対しては「（専門的）知識に基づく言論」によって教授することはできないので、そういう人たちを説得するためにはむしろ「人々に共通な見解を通じて説得立証（説得するための証拠立て）」と言論（弁論）をおこなわなければならない」というのです。

浅野によれば、一般的な聞き手に対して用いられるのは、「常識」ということになる。もともとは専門的な知識であったものも、大衆に対してわかりやすく伝えられることで新たな常識となる。常識はレトリックによる議論の基盤である。説明的文章においても、読み手が日常生活を通して持つ経験や常識は大きな役割を果たしている。特に書き出しの部分は、常識から始められることが多い。説明的文章は、レトリックによる議論であると改めてとらえられる。

しかし、説明的文章教材の目的は、読み手のある行動

へと導くために、例えば自然科学的な知識などの専門的知識をまず説明するなど複合的なものである。説明的文章において、常識化されていない専門的知識が扱われることについて、どのようにとらえればよいのか。

浅野は、レトリックとは通念（エンドクサ）を用いて人を説得する術であり、専門的知識を探究した場合それは専門的議論になるとする一方で、常識とレトリックの発展について次のように述べる¹²⁾。

レトリケーもディアレクティケーも、その取り扱う事柄に関するエンドクサに基づく『言論の知識』です。そして言論の「知識」であるからには、それを研究する専門家もまた存在することになります。しかしレトリケーもディアレクティケーも、それ自体がその取り扱う事柄に関する専門的知識となることはできません。専門的研究の成果としての知識をエンドクサのあたりで共有することができただけです。しかしまた、そのエンドクサの内容も、専門的知識の発展に応じて、より豊かに、かつ蓋然性の高いものになっていくはずです。レトリケーにもディアレクティケーにも、それについていく努力が求められるのです。

近代社会において、学習者は「大衆」であると同時に、学校という制度において学問という文化的実践に参加する存在でもある。各教科で学ぶ知識は、初歩的な専門的知識の一部であり、説明的文章を理解する際にも用いら

れる。説明的文章教材においては、そうした知識を背景としながら、常識と絡めた専門的知識の説明がなされ、読み手は言語を媒介として理解を形成し、新たな知識を獲得する。説明的文章教材は、現代におけるレトリックの新しい姿を示しているのとらえることができるのではないだろうか。

5 説明的文章教材における知識

以上のような知識哲学における議論から、説明的文章における知識はどのようなにとらえられるか、まとめてみたい。

- ① 説明的文章は、専門的知識と常識から構成される。筆者は、専門的知識を常識と結びつけ、正当化しながら説明する。
- ② 説明的文章では、理論的知識や常識を根拠として実践的知識や制作的知識が述べられる場合がある。
- ③ 説明的文章において提示される知識は、何らかの過程や方法によって正当化が行われていて、正当化の過程は文章構造に反映している。
- ④ 説明的文章において、筆者と読み手は認識論的な依存関係にあるが、読み手は、文章表現として示された推論による正当化の過程や方法、筆者に関する表象によって、受け取る知識への信頼性を判断する。
- ⑤ 読み手は、文章に提示された知識が真であることを求めるとは限らず、世界のとらえ方としてのもつ

ともらしさを求めることもある。

四 知識から見た中学校二年生説明的文章教材の類型

1 分類の観点

説明的文章における知識をこのようなものとして見ると、中学校段階の説明的文章教材はどのようなにとらえられるか。ここでは、現行の中学校二年生国語教科書（二〇〇五年文部科学省検）に採録された説明的文章教材（十五教材）について、知識のあり方という観点から分類を行ってみたい。というのは、中一の説明的文章教材には、科学的知識を説明するというタイプのものが多いという傾向がうかがわれ、小学校教材からの連続においてとらえられる。これに対して、中二にはそうした教材は少なく、これまでも触れたように知識が多様化、複合化していて、傾向を見出しにくい。そうした教材群にこれまで検討した知識の観点から何らかの類型性を見出すことは、高等学校の評論教材にまでつながる教材の系統性を見出す手掛かりになるのではないかと考えられるのである。

具体的には、アリストテレスによる知識の三分類を観点として設定し、分類を試みた。その結果、ゆるやかではあるが、次のような類型が見出された。

a 知を説明する教材：知や知識そのものについて説明するもの。

半田智久「知ることの魅力」(教育出版)

龍村仁「ガイアの知性」(教育出版)

谷岡一郎「社会調査のうそ」(東京書籍)

b 理論知を説明する教材：科学的知識について説明するもの。

村山司「考えるイルカ」(東京書籍)

松沢哲郎「文化を伝えるチンパンジー」(光村図書)

c 理論知から実践知へと展開する教材：理論知を説明しながら、実践知について主張を発展させるもの。

前提となる知識には、科学的知識、哲学的知識、歴史的知識、制作知の場合が見られた。

・科学的知識

河合雅雄「若者が文化を創造する」(学校図書)

・心理学的、哲学的知識

なだいなだ「逃げることは、ほんとうにひきょうか

(学校図書)

・歴史的知識

安田喜憲「モアイは語る」(光村図書)

ラッセル・フリードマン「小さな労働者」(東京書籍)

井上恭介「壁に残された伝言」(三省堂)

・制作知

平田オリザ「対話を考える」(三省堂)

鴻池尚史「言葉の達人になろう」(教育出版)

d 制作知を説明する教材：ある考え方に基づいて、何かを作る過程や意義を説明するもの。

大場信義「ホタルの里づくり」(三省堂)

村田稔「一人に優しい町づくり」(教育出版)

赤瀬川原平「神奈川沖浪裏」(東京書籍)

2 知識から見た各類型の特徴

a 知を説明する教材

知のあり方そのものについて述べた教材が見られた。

「知ることの魅力」は、おそらく対話(ディアレクティケー)による知という考え方が基盤となつていと思われるが、信念を表す表現で述べられていて、そうした理論知を裏付ける記述は見られない。

「ガイアの知性」の筆者は映画監督である。そのためか、文章中の知識は、科学者による動物の観察の引用であり、認識論的依存の強い文章となつている。

「社会調査のうそ」は、社会科学的方法である統計調査の結果が、現実的な社会において、相関関係を因果関係としてとらえるなど誤つてとらえられがちであることを説明する。現代においてどのような能力を身につけるべきかという実践知を述べていて、cの要素も持つ教材である。

b 理論知を説明する教材

いずれも動物の行動について説明する二教材がここに分類されたが、中学校二年生の説明的文章教材に科学的

知識の説明を中心にする文章が少ない原因は、次に見るように、科学的知識の説明から、それを根拠として実践知の主張へと論を展開する教材が多いためと考えられる。

c 理論知から実践知へと展開する教材

c は、どのような理論知を前提にしているかによって、さらに四種に分けられた。

科学的知識をもとに主張を述べるのは「若者が文化を創造する」である。サル食文化の成立過程の説明から、人間社会における世代間の関係のあり方と、若者における創造性の発揮という実践知へと論が展開する。

「逃げることは、ほんとうにひきょうか」（学校図書）は、人間社会における「逃げない」というルールについて、おそらく心理学や哲学、人類学などを基盤とした知識を説明した後、その例外として「逃げる」ということの必要性を読者に対し問題提起している。

歴史的知識をもとに述べているとみなされたものは三教材である。「モアイは語る」は、調査を通してイースター島の歴史について明らかにしたことを説明した後、地球との類似性から、人口増加に伴う地球の森林環境・人口増加の危機について警告するものである。

歴史的知識に基づくものに分類した他の二教材は、分類に迷った。「小さな労働者」は、写真家ハインの伝記である。「壁に残された伝言」は広島島の原爆に関わる記録である。どちらも個別の歴史的現象を説明しているが、実践知を明示的に述べるものではなく、別に分類するべ

きかもしれない。

「言葉の達人になろう」は、演劇理論との類似性から、対人コミュニケーションのあり方や気を付けるべき点について述べる文章であるため、制作知から実践知に展開したものとした。「対話を考える」は、対話に関する哲学的な議論もふまえていると思われるが、演劇制作の経験に基づいたものとして同じように位置づけた。

d 制作知を説明する教材

「ホタルの里づくり」は、自然科学的な知識を基盤にして、ホタルの生息地を復活させる過程を事例的に説明したものである。

「人に優しい町づくり」は、車イスを使用する人たちが自由に生活できる社会を作るために、どのような環境を実現する必要があるのか、なぜそれが必要なかが述べられている。

「神奈川沖浪裏」は、浮世絵を題材とした文章である。浮世絵を描くためのものではなく、鑑賞するためのものであるが、ここに分類した。

五 おわりに

本稿では、説明的文章における知識のあり方について、古代ギリシャの哲学をガイドとして考察を行ったうえで、知識の観点から中学校二年生の説明的文章教材の分類を行った。学問分野によらない分類の可能性を考えたが、

結果は大きく変わらないものとなったようにも思われる。ただ、分類を行う過程で、どのような知識や推論を用いて文章表現が構成されているかを見たため、違った見方ができたとは感じている。それらを方法化することについては、対象学年を中学校三年生に広げて、試みたい。

注

¹ 国語教育研究所『国語教育研究辞典』（明治図書、一九八八年、「批判読み」の項目執筆者は渋谷孝）では、「批評読み」の直接的な提唱のはじまりを東京都荒川区教職員組合同語部会（『批判読み』明治図書、一九六三年）によるとしている。

² 小田迪夫『説明的文章指導の授業改革』（明治図書、一九八六年）で、「レトリック認識の読み」と位置づけられている。

³ 長崎伸仁『説明的文章の読みの系統』（素人社、一九九二年）では、こうした観点から小学校の説明的文章教材の分類と傾向の分析が行われている。

⁴ アリストテレス『ニコマコス倫理学』（上巻、岩波文庫、一九七一年）の第六章。

⁵ プラトン『テアイテトス』岩波文庫、一九六六年

⁶ 蔵田信雄「信と知」『知識／情報の哲学』岩波講座哲学4、岩波書店、二〇〇八年、二二二頁

⁷ 戸田山和久『知識の哲学』産業図書、二〇〇二年、一三二―一三七頁。知識哲学の概要理解については、戸田山の著作に多くを負っている。

⁸ 同右書、二二二頁

⁹ 例えば、フーコー『性の歴史』I―III、新潮社、一九八六―一九八七年など。

¹⁰ 戸田山前掲書（二四頁）では、ステイッチによる考え方として紹介されている（ステイッチ『断片化する理性』勁草書房、二〇〇六年として翻訳されている）。

¹¹ 浅野植英『論証のレトリック』講談社、一九九六年、二二二頁
¹² 同右書、二〇一頁